

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	発達支援ゆず本山ルーム		
○保護者評価実施期間	2025年 2月 10日		2025年 3月 7日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	48	(回答者数) 36
○従業員評価実施期間	2025年 2月 18日		2025年 2月 28日
○従業員評価有効回答数	(対象者数)	4	(回答者数) 4
○事業者向け自己評価表作成日	2024年 3月 20日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	遊びの中でお子様の興味や関心を大切にしながら関わることで、安心して過ごせる環境づくりにつなげている。そうした関係性の中で信頼が深まり、自発的な行動や表現の増加につながっている。	お子様からの発信をしっかりと受け止め、どのスタッフも一貫した姿勢で丁寧に応じるよう意識している。また、スタッフ間での情報共有を密に行い、担当が変わっても支援の質が保たれるよう努めている。	児童の興味関心に合った関わりや支援内容をさらに探求し、個々の成長や表現をより自然に引き出せるような展開方法を模索していく。
2	個別療育を通して、保護者の方の悩みに寄り添い、安心して相談できる環境づくりに努めている。保護者とともに、お子様への手立てを一緒に考える姿勢を大切にしている。	保護者が日常の中で感じている困りごとや心配について、聞き取りや会話の中で丁寧に受け止めている。そのうえで、お子様への対応について一緒に考え、具体的な方法を共に模索している。	進路や子育ての悩みなど多様な相談に対応できるよう、スタッフが常に専門性を高める意識を持ち、最新の情報を共有しながら支援にあたる。事例検討や内部研修を通じてスタッフ間の連携も深めていく。

3	評価チャートを活用することで、担当者の主観に偏らず、客観的にお子様の課題を捉えることができている。共通の視点での理解が可能となり、それに基づいた適切な遊びプログラムの構築によって、効果的な発達支援を実施している。	遊びを通じて常にお子様の様子を観察・評価し、「できるようになったこと」「うまく取り組めないこと」「困っている背景」などを丁寧に捉えるようにしている。こうした日々の観察を、支援計画の立案に活かしている。	療育の質をさらに高めていくために、スタッフ一人ひとりのスキルアップを図る必要がある。勉強会や事例検討会、外部研修などを活用し、誰が担当しても同じような支援効果が得られるような体制を整えていく。
---	--	--	--

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者に対するフィードバックは支援において重要な要素であるが、十分に行えないことがあり、担当者が伝えたい内容が保護者に正しく伝わらないケースがある。	お子さんの遊びを中心とした個別療育に重点が置かれていることで、保護者とじっくり関わる時間の確保が難しくなる場面がある。また、担当者によっては保護者支援の重要性に対する認識が十分でない場合もある。	担当者が「保護者へのフィードバックの重要性」を継続して意識できるよう、研修や振り返りの機会を設けるとともに、フィードバックの方法や内容についても共通の基準を持てるよう整備していく。日頃から意識付けを行い、支援の一貫性を高める。
2	療育の中で予定された時間を大きく超過してしまうことがあり、支援全体の流れや他の利用児への影響が出ることがある。	お子さんの自主性を大切にする姿勢を優先しすぎるあまり、時間の区切りや進行に意識を向けることが難しくなる傾向がある。支援のリズムやタイミングに対する配慮が不足する場面も見られる。	お子さんの特性や困りごとの背景を丁寧に捉えた上で、必要な支援を適切なタイミングで行えるスキルを高めていくことが求められる。遊びの展開と時間管理を両立できるよう、見立てと実践力の向上に努める。
3	欠席時などの対応や案内において、スタッフ間の対応に差が出ることもあり、保護者に対して一貫した情報提供ができていない場面がある。	保護者の方へのご案内内容や対応方法について、スタッフ間での共通認識が不十分であり、それぞれの判断で対応してしまうことがある。	ご利用に関するルールや案内すべき事項について、スタッフ全員が同じ認識を持てるように整理し、見える化された形で掲示・共有していく。誰が対応しても同じ情報を伝えられる体制づくりを進める。